

書評

リスクアセスメント力が身につく
実践的医療安全
トレーニング

- 著 石川雅彦／齊藤奈緒美
- 定価 本体 3200 円＋税
- 発行 医学書院

評者

中京大学法科大学院教授／元判事
稲葉一人

日頃の違和感や悩みに
向き合えるトレーニングが満載

私は、裁判官を辞してから医療を大学院で学び、厚生労働省や医療機能評価機構の委員をし現場での医療者の支援をしている。まず本書の一般的な書評をする。特徴的な点は、実践的であるための、さまざまな工夫（からくり）が仕込まれていることにある。

1つは、具体的であること。とかく抽象的になる演習を具体的な教材を提示し、その運営方法（プロトコル）を示している。2つは、具体的な演習の背景に理論・理屈を示していることであろう。3つは、医療が人間（ヒューマン）によって行われていることを慎重に理解し対応していることにある。

負の連鎖を断ち切る
具体的なトレーニング

では、より突っ込んだ書評である。私たちが医療の文化を変えるには、Why（なぜか）、What（なにか）、How（いかに）、そして、Outcome（結果）を明確にしながら行うということが必要である。これを本書から読み取る。

まず、マニュアル遵守を促すトレーニングである（トレーニング1）。医療現場はマニュアルがあふれ、事故等が起これるとさらにこれが加速される。誰も「マニュアルはあるのだけれど」という疑問から始まる。患者を取り違えないようマニュアルを作る。当面は守られる。しかし、皆が次第に慣れて忘れ、実施されず、事故が繰り返される（Why）。この負の連鎖を切るためには、「マニュアル遵守を促す」こと（What）が根幹にあり、具体的なトレーニングが提案されている（How）。

多職種の参加を促し医療安全・
患者家族対応に活かす

本書に通底する考えは、医療の現状の正確な把握と、私たちの弱さをしっかり

と見据えてトレーニングを提案していることにある。本書は、医療安全・患者家族対応で最大の問題である多職種協働に、次のようにアプローチする。

総合案内で、「昨日の健康診断時の採血後に痛みが発生した」ことについて対応を求める患者の事例を使い、「あなたが受付職員であればどのように対応するか」を問う。

まとめは、「医療にかかわる事例に対する討議では、事務職員や栄養科職員などの非医療職は、事例の状況をイメージしにくいために、積極的に討議に参加できない可能性もあるが、本事例のような状況では患者・家族の心情に近い思考が期待できる。多職種それぞれの特徴を活かした検討ができるように参加者の関心を高めたい」「臨床で発生する可能性のある、職員である自分が突然対応を求められかねない状況を想定し、多職種が参加した討議をととしてさまざまな認識の違いを理解することにより、「チーム力」が発揮され、職員だけではなく患者・家族の心情にも気づくことにつながる」と結ぶ（Outcome）。

以上のコメントはじっくりと味わいたい。医療は今、医療者の視点だけでは解決や適切な処理が難しい場面が増えている。著者らは、早くから医療安全・患者家族対応等について研修を実施し、また多くの臨床現場でその対応に具体的に関わる経験を有している。

今大切なのは、「いつもこれっていけないと思うけどできていない」ことなど、日頃の違和感や悩みに真っすぐに向き合うことである。そのような、真っすぐなトレーニングリソース（24のトレーニング）が満載な書である。